

# 石と人、人と石

—来待ストーンミュージアムに期待するもの—

高 安 克 己

初期の人類が石で作った道具を用いていた例を出すまでもなく、石とヒトとの関わりは古い。いや、ヒトばかりでなく、チンパンジーも石を道具のように使っているという話を最近聞いたことがある。どうやら、石はわれわれの身近な生活空間にあって、そのままでもよし、また、様々な加工を施してもよし、武器にも道具にもなる最も手軽な素材であったらしい。

仕事柄、海外に出かけてあまり観光客が行かないようなところを見てまわることが多い。来待ストーンでお手伝いをさせていただくようになってからは、その土地の人々と石との関わりについても、とくに注意を払って見てくることにしている。

これはネパール南部の山の中でのこと、シワリク層という地層に挟まれている少し石灰質の細粒砂岩を加工して、シラウタと呼ばれるすりこぎ板のような道具を作っている光景に出会った。まず男が河原で加工に適した大きな礫を探し、「石の目」を見定めて厚さ10cmぐらいの石板にする。これを村まで担ぎ上げ、広場で待ちかねていた「職人さん」たちに渡す。「職人さん」の中には女も子供もいる。それぞれの分担が決まっているようで、ハンマーと鑿を使い、巧みにすりこぎ板とすりこぎ棒に加工していく。この石は来待石よりも少し時代が新しいが、ヒマラヤ造山の影響を受けているために思いのほか堅い。それがまた、すりこぎに適しているのかもしれない。

このシラウタという道具は、ピクルスと香辛料を練り合わせたようなアチャールと呼ばれる食べ物を作るのに用いる。それで何種類もの香辛料をすりつぶしている様子は磨製石器を使う古代人の生活を彷彿とさせるところがある。ネパールの山の中といえども、今ならたいていは金属製の台所用具が普及しているというのに、しかし、アチャールをつくるときはやはりこれが一番だと彼らは言う。



ネパール式すりこぎ器シラウタの作成工房（ティナウ川中流の村で）

石という素材へのこだわりは、なにもネパールに限らずわれわれの生活の中にもいくらでもありそうだ。それは、石の持つ特性がその鉱物組成や化学組成を反映して実に多様であり、だからこそ、いつの世の中でも様々な場面で重要な素材として必要とされてきたのである。しかし、石は道具作成の素材としてのみ利用されてきたのではない。石が持つ独特の感触や色合いに芸術的価値を見いだす人も少なくない。彫刻の素材として古代より石が用いられてきたことは洋の東西に関わらず共通している。来待石の石灯籠も、昔は確かに実用性が強調されたこともあったのだろうが、いつの頃からか、わびとさびの世界を演出する日本庭園には欠くことのできない点景のひとつになっている。

来待ストーンミュージアムは石と人との関わりを扱った一種の産業博物館である。博物館活動の一環として、これから石に関する様々な資料（もの）を集める活動が展開されていくことになる。その際に、上記のようなことからも、収集資料をまず実用性と芸術性と2つの軸で定まる平面に落としてみる習慣を付けてみたらどうだろうか。次にその時代性を時間軸に沿って検討していくのである。石という素材から生み出される作品には、つくられた時代が古いとか新しいとかということだけではその真価が見えてこないものも多々ある。実用性や芸術性のなかにはその時々の社会的背景と同時に、作者である石工さんの作品への思いいれやこだわりが強烈に反映されているはずである。それをきちんと分析した上で、道具としての実用性や作品としての芸術性を時間の流れの中で位置づけるのである。その場合には、加工技術の発達段階や原料石材と製品の流通の状況など、素材そのものとは直接に関わらない問題についても検討していくことになる。

要は、このミュージアムで扱う「もの」は、考古遺物や化石の標本とは違って、作者である石工さんたちの心意気が来館者に伝わるものでなければならない、ということである。来待石の切り出しから石灯籠ができるまでを画像と音声と实物で追った展示は、このために大いに役立っていると思う。また、プロの指導を受けながら実際に石を彫ってみる工房での体験コーナーも、このために効果的である。今後は、来待石を使った新素材づくりにも挑戦し、このミュージアムを新産業開発と後継者づくりにも役立てる計画だと聞いている。「来待石研究会」はそのための学問的裏付けと普及のために、ミュージアムと車の両輪のような関係にあると理解している。素材としての石の個性に関わる鉱物化学的性質や成因などの解明は、地質学など既存の学問領域でもできる。しかし、その個性をいかに引き出し、生活の中に取り入れていくか、ということについては、これまで石とつきあい、石の個性を知り尽くしている石工さんたちと、石を生活に利用するわれわれすべてに与えられた共通の研究課題であると思う。

あくまで石にこだわり続ける来待ストーンミュージアムが中心となり、石と人、人と石をつなげるインターフェースとして、このユニークな活動の輪が日本各地や世界にまでも広がっていくことを期待している。

